

光と潮風のサンディエゴ

——ピートからの誘い——

It has been a while since we last communicated directly, and I hope this letter finds you well.

「今年のINTA（アメリカ商標協会）の総会には是非出席してほしい。」
ピートから誘いのファックスが入ったが、わたしは気が進まなかつた。5月初めに南アのヨハネスブルグの出張から帰り、ゴールデンウィークを数日東京で過ごし、またすぐサンディエゴ行きはきつい。50代になれば、アジア、アフリカ、アメリカと、2週間続きの地球半周の旅は体にこたえる。

だがピートはしつこかった。説得するためまた2ページのファックスを送ってきた。

I am writing separately to you because while I know that you have not attended INTA meetings in the past, I would like especially to encourage you to attend this time.

お前は今まで何回誘ってもINTA総会に来ない。今回も来ないと思うから特別この手紙を書いているのだ……という。

ピートはアメリカの有名なスポーツ品メーカーP社の社内弁護士である。P社は、毎年、INTAの総会にあわせ、仕事を依頼している世界各地の弁護士との合同ミーティングを行う。今回もオーストラリア、韓国、台湾、シンガポール、インドネシア、マレーシア、香港、中国などから参加するので、わたしにもアジア・太平洋地区会議に参加して欲しいとの誘いである。

「コピー品駆逐のため働いている仲間の弁護士との情報交換もできる。それにINTAには世界各国から4000人近くのIPローヤー（知的所有権を専門とする弁護士）が集まるので、ビジネスのコネもでき事務所のプロモーションになること間違いない……」
わたしがプロモーションには興味がないのを知っているはずなのに……。いつもビジネスし

か頭にないアメリカ流に苦笑しながら、読み進む。

I of course do not know whether additional business is of interest to you, but you must know that I think very highly of you and your firm's work, not only generally but in comparison with other Japanese counsel of which I am aware.

お世辞とはいえ、「よい仕事をしている」とここまでヨイショされたのでは、わたしも悪い気はしない。悪のりの気配もあるが、ちょうど別件でロサンゼルスの用事もでき、わたしはINTAに出席することにした。

——旧友との思いがけない再会——

会場のサンディエゴ・マリオット・ホテルにチェックインするや否や、わたしはこの総会が巨大なビジネスの場であることを知った。

ホテルのロビーは早朝から深夜までIPローヤーで溢れている。アメリカ商標協会の総会とはいいうものの、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、南アメリカ、オーストラリアなどから弁護士が集まる国際的なイベントである。

「巨大化した国際会議に出席して、何百という名刺を交換しても意味はない。そんな薄い付き合いからたとえビジネスが生まれても、たいした仕事ではない。われわれの仕事は、長い付き合いのある信頼できる者の紹介がないと危険である。」これがわたしの長年の持論である。だからわたしは巨大化した国際会議に出席する必要を認めなかつた。

だが、INTA総会は、何よりも旧友と会う絶好の機会だった。ロビーで偶然に20年来の友人のイギリス人のソリシターのボブと会ったし、食堂ではかつて香港とともに仕事をし、今はロンドンの事務所に勤めているレイと出会つた。

念のため参加者リストを調べてみた。イギリスの事務所時代に、隣部屋で仲良くしていたドンも参加していた。台湾で一緒に仕事をした「悪夢のカーリー」も、勿論、顔を出していた（『悪夢のカーリー「ゲロゲロペー』』で掲載予定）。かつて事務所訪問をしたワシントンDCのベルツィも参加していた。

ミネアポリスのハムリとは、パーティーで旧交を暖めた（『遙かなるザルツブルグ』参照）。ここ数年来ファックスのやりとりだけだったブラム（スイス人弁護士）とは、アフタヌーン・ティーを共にした。驚くことに、旧知の弁護士30人近くが参加している。INTA総会は、ふだん会うこともない海外の友人、知人の弁護士とまとめて会う絶好の機会だった。

IP関連業者の売り込みも盛んである。

商標検索業者がブースを設け、独自のシステムを売り込んでいる。

日本の検索会社もアメリカ企業と提携しているとかで、パーティーを開いていた。パーティー会場はホテルからバスで7～8分のところにある客船。貸し切りである。ホテルと船の間はシャトルバスサービスがあり、INTAの参加者は誰でも自由に参加できる。

パーティー会場では、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語などが飛び交う。バンド演奏が入り、生ガキやローストハムやサンドウィッチの軽食がだされ、アルコールは飲み放題である。

パーティーは業者にとっては絶好の宣伝の場所だろうが、これだけ大がかりなパーティーには大変なコストがかかるに違いない。

世界各国の商標の検索は巨大なビジネスであると、わたしは今更ながら知った。

——ジャカランダの花が咲いていた！——

P社のミーティングは朝7時から2時間程かけて開かれた。まず、各国の弁護士約60人が簡単な自己紹介を行い、続いてピートからアジア地区におけるコピー品対策の現状報告があった。台湾、香港、インドネシア等でのコピー品差し押さえや税関との協力関係、本物とコピー品とを見分けるポイント、コピー品の流通ルートなどについて詳細な説明が続く。

次にP社の今後の新製品、各国での商標出願の状況、ライバルメーカーとの各国での係争状況などが担当者から報告される。

P社のミーティングが終わると、INTAの数多くのシンポジウムがある。わたしも出た方がよいのだが、午前中から午後にかけて、ピートが紹介してくれた新しいアメリカのクライアントとの打合わせが続き、とても時間がとれない。

午後は、日頃付合いのあるアメリカ、カナダの法律事務所のカクテルパーティーが、3時、5時、7時と続くので、こまめに顔を出す。

東京での仕事もあり、あまりサンディエゴには長居はできなかった。2泊しただけで、わたしは帰国のために空港に向かった。

その途中、タクシーで簡単に市内観光。ここは20年近く前、留学時代に妻と2人で訪れ、スペイン系の家族に2日ほどホーム・ステイをした。

あの時もサンディエゴを見学したはずだが、記憶は不確かで、まるで初めて訪れたような気がする。

ダウンタウンの一角を通り過ぎ、ウェスト・アッシアベニューとパシフィック・ハイウェーの交差点近くにさしかかったとき、紫の花の街路樹が見えた。

「ちょっとタクシーを止めて、その紫の花を見たいんだが……。」
運転手に確かめると、まさにジャカランダだった。

二週間前訪れた南アでは、ジャカランダの花を見ようと首都のプレトリアをまで足をのばしたのに、そこは初秋で花は散った後だった。だが同じ時期、ここサンディエゴは初夏。あのジャカランダが真盛りである。思いがけない出会いにわたしは感激し、運転手を待たせてしばし通りを散策した。日差しは強く、空気は乾き、時折、潮風が海の香を運んでくる。

ジャカランダはノウゼンカツラ科の木だが、枝ぶりはちょうど桜に似て、その咲くさまは桜並木を思わせる。

花を見上げていると、薄紫の花弁がスッと音もなく舞い落ちる。気がつくと地表は花びらで埋まり、紫の絨毯を敷き詰めたよう。

一瞬ほのかな香りをかいだ気がして、わたしは散ったばかりの落花を拾ったが、何の香もない。秘やかな甘い香りがしたと思ったのは、気のせいだったか、それとも通りすがりの若い女性の移り香だったか？　光と潮風の街で、ジャカランダはあでやかに咲いていた。